

トルコ「人災」地震に「民間」救助隊が活躍

宇田有三

八月一七日午前三時二分、トルコの西部が約四五秒間、激しく揺れた。マグニチュード7.4の地震が起こって三週間が過ぎようとしている今、いまだ瓦礫の下には、一万人を超える市民が埋まったままである。この地震による死者の数は今後、四万人に達する可能性さえある。

イスタンブール在住の、トルコ政府関係の建築技師は、「地震の犠牲者の多くは、倒壊した建物の下敷きになった。これは、粗悪な材質の建築資材を使って手抜き工事をした建築業者と違法建築を見逃してきた行政の責任だ」と言い切る。

地震直後、トルコ軍の救出活動は、犠牲者の多かった民間人よりも軍関係者の方を優先させた。「救出作業がもっと早かつたら多くの人を救出できたのに」。政府を非難する声があがった。一方、外国の救援チームの救助活動は、テレビや新聞で大きく取り上げられていた。

自国の救援部隊の陰が薄くなったと感じたトルコ政府は、公式なルートで要請した外国の救助隊に対し、現場での捜索依頼を次第に出さなくなっていた。トルコの災害対策本部のすぐそばにキャンプを張り、救助要請の指示を



トルコ山松の瓦礫の中、救出活動をする市民の姿。トルコ市登り兄弟。

待つ外国の救助チームを多く見た。「俺たちは、救助にやってきたのに。いつになったら動けるんだ」。そう言う救助隊員の声も聞いた。

「国」派遣の救助隊は身動きがとれなくなっていた。そんな状況で、ひとりでも多くの人命を救おうと救助活動を続ける「民間」の救援隊の姿があった。日本レスキュー協会（本部 大阪）から派遣された松崎正人（26）（直人 24）兄弟の姿である。

二頭の救助犬（R・Jとドイル）をつれて現地に乗り込んだ二人は二十二日、ヤロバ市で活動を共にしていた日本政府の救助隊が撤収した後、被害が最もひどいアダバザル市へ入った。

「生存者がいる」。その情報をもとに翌日午後六時過ぎ、彼らは救出現場へ向かった。

高層アパートの瓦礫の山に登った二人と二頭は早速、生存者の位置確認を始める。二頭の犬は、ある特定の場所で生存者の反応を示した。松崎兄・直人、デンマーク人、トルコ兵、現地のボランティアの四人もまた、生存者の確

認をした。余震が来たら、いつ崩れ落ちるかも知れない場所で救出作業を続ける。

地震対策のトルコ本部へ瓦礫を撤去するための重機を要請するが受け入れられない。二人を含め、その場いた現地のトルコ人のボランティアたちは仕方なく、手作業でコンクリート片を取り除き始めた。

朝七時まで続いた徹夜の救出作業は実を結ばなかった。「救出隊がいれば」。救出現場をいくつも見て、私は何度も思った。

自然災害の犠牲者を救うのに、その活動の障害となる壁がいくつもあった。この地震の「人災」というべき側面を今後、きちんと検証していかねばならない。